様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０２５

研究課題名（和文）アナロジーの美学ーベルクソンの「美学講義」をめぐって

研究課題名（英文）Aesthetics of analogy - concerning Bergson's lectures on aesthetics

研究代表者
滝　一郎（Taki, Ichiro）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２４２０７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円、（間接経費）　　810,000円

研究成果の概要（和文）：ベルクソンはパリのアンリ四世校で1891-1893年に哲学講義を行っているが、その講義を聴講したアルフレッド・ジャリの自筆ノートには未公刊の「美学講義」が含まれている。この講義ノート　のマニュスクリプトを解読し、テクストの校定を行った。そこには、カント、シラー、スペンサーのような「ディレッタントの美学」とヘーゲルの弟子であるシュナイダーの「功利主義的美学」との和解が試みられ、「魂における遊戯」、「目的なき合目的性」、「個人的な生」を超越しながら「人類の生」、「永遠の象徴」を希求するベルクソン自身の美学ーアナロジーの論理による直観の美学ーの萌芽が認められる。

研究成果の概要（英文）：Bergson gave lectures on philosophy in 1891-1893 in Lycee Henri IV in Paris. One of auditors, Alfred Jarry took notes on these lectures, among which I found some lectures on aesthetics, unpublished until now. I deciphered manuscripts of his notes to revise a text of these lectures. We can find there a germination of Bergsonian aesthetics, i.d. aesthetics of intuition with the logic of analogy, which, trying to reconcile "dilettante aesthetics" (Kant, Schiller, Spencer) and "utilitarian aesthetics" (Schneider, a disciple of Hegel), longs for "life of humanity" and "symbol of eternity", going beyond "play in soul", "finality without purpose" or "individual life".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学

キーワード：ベルクソン　アルフレッド・ジャリ　美学　哲学　思想史　アナロジー　直観

１．研究開始当初の背景

２１世紀の社会を特徴づける「デジタル構造」は、人々に＜定量的な選択＞を強いるもので、その限界と危険性とが指摘され始めた。今や、この「デジタル構造」を補完すべく、人々に＜定性的な決断＞を促し、自由と創造の世界に入ることを可能にするものとして、「アナログ構造」が見直されている。本研究は、こうした時代状況の中で「アナロジー」の重要性を再考すべく開始された。

２．研究の目的

「アナログ構造」が見直される時代状況を視野に入れて、本研究は、帰納や演繹よりも類比（アナロジー）を重視するフランス・スピリチュアリスムの思潮のなかでも、とりわけベルクソンの哲学に注目し、そこから理性と想像力を糧とする「アナロジーの美学」の生成過程を明らかにすることを目的とするものである。

この目的のために、ベルクソンの「美学講義」に注目し、これをベルクソン哲学全体との関連において、また東西の比較思想史的文脈のなかで究明することが課題となる。ベルクソンの「美学講義」が示唆する「アナロジーの美学」は、自然を簒奪してきた近代の人間中心主義を反省して、宇宙における人間の位置を問い直すという意義をもつはずである。それはマテリアリスムよりもスピリチュアリスムの観点から、「一義性」ではなく「類比」を鍵言葉としてベルクソンを読み解くという点で、ドゥルーズ以後の新たなベルクソン読解の試みともなるにちがいない。

３．研究の方法

ベルクソンはパリのアンリ四世校で1891-1893 年に哲学講義を行っているが、その講義を聴講したアルフレッド・ジャリの自筆ノートには未公刊の「美学講義」が含まれている。ベルクソンの美学講義は、これまでクレルモン=フェランでの講義ノートが H. Hude 版(1992)と R. Ragghianti 版(2003)と二種類出ているが、このパリでの美学講義は S. Matton 版(2010)のベルクソン哲学講義にも収録されることのなかった新発見の資料である。本研究は、この資料が保管されているパリ大学のジャック・ドゥーセ文学図書館に通って、ジャリのマニュスクリプトを解読し、テクスト校定を行うことによって、そこにベルクソン美学の生成過程をたどるという草稿研究の方法をとった。

４．研究成果

ベルクソン美学のテクスト生成研究を通して、クレルモン=フェランでの美学講義(c.1887)とパリでの美学講義(1892-93)とを比較することにより、次のことが明らかになった。

(1) クレルモン=フェラン版では、「芸術は美の産出を目的とする。…芸術は人間的な何ものか、つまり感情や思惟や活動を感覚的な形のものに表す」として、主に芸術と人間との関係を主観の側から問題にしていたのに対して、パリ版では、「芸術は美の表現である。…芸術は美の延長である」と言われ、芸術が自然の模倣であるか否かが問われて、むしろ芸術と自然との関係が客観の側から問題とされ、更に、芸術と科学、芸術と道徳との相違を明らかにしようとしている。

(2) クレルモン=フェラン版では、プラトンのイデア論を修正し、ドイツ観念論美学の不十分が指摘され、美の心理学的研究法と「表現」の理論が提出されていたが、パリ版になると、カント、シラー、スペンサーのような「ディレッタントの美学」とヘーゲルの弟子であるシュナイダーの「功利主義的美学」との和解が試みられ、「魂における遊戯」、「目的なき合目的性」、「個人的な生」を超越しながら「人類の生」、「永遠の象徴」を希求するベルクソン自身の美学の超越的な方向性が強く打ち出されてくる。

(3) しかし、クレルモン=フェラン版とパリ版とを通して、美と芸術の「表現」論を補完する「共感」論が、つねにベルクソン美学の中心にあり、これが主観から客観へと、精神から自然へと、個人から人類へと、また時間から永遠へと、延いてはエランヴィタールの源泉としての神へと、われわれをして内を通って上に昇らせる（昇現 surpression を可能にする）アナロジーの論理を伴った「直観」の美学を生成させていることが明らかになった。

本研究の国内外における位置づけとしては、ベルクソン美学研究において、延いてはベルクソン哲学研究において、「アナロジー」の重要性に注目した研究は、D. Lapoujade などの例外的な研究を除いて、殆ど見当たらないので、独創的で先駆的な研究であると言いうる。現在、多くのベルクソン研究がドゥルーズの強い影響化にあって、ベルクソン哲学のもつ超越性を等閑にふし、もっぱらこれを内在的な次元に還元して理解しようとしていることを考えると、神の創造した人類の立場にたって道徳と宗教の問題に取り組んだベルクソン哲学の真の理解のために本研究の果たす役割は少なくない。また、美学研究としても、美や芸術が超越の次元において宗教と方向を同じくしていることを存在論的な立場から（あるいは脱存在論的な立場から）考究している研究は、今道友信などの例外的な業績を除いて皆無に近いことを考えるならば、本研究のこの分野において照らす光も、少なくともその方向性においては、ひとつの指標として有効であろう。

今後の展望として、本研究が想像力の再評価および形而上学的美学の可能性について、新たな知見をもたらすことを指摘しておこう。

(1) ベルクソン美学についての本研究が、美と芸術と感性についての反省を通してわれわれに示唆するのは、「創造的想像の類比」とも言うべき思想である。「イマージュ」の概念がベルクソンにおいて元来、表象と物、主観と客観、精神と物質といった両側面の間に置かれていることは、二元論の難点を軽減しつつ「持続」一元論を可能にする鍵が「イマージュ」にあるということであるが、そこでは「イマージュ」を形成する作用としての imagination が、イマージュ同士の間の水平的 resemblance ではなく、イマージュの有無の間の垂直的 similarity を介して働くということである。このようなベルクソン的アナロジーは、＜イマージュからの想像的類比＞というより＜イマージュへの創造的類比＞として、イスラーム哲学における「アーラム・ミサール alam mithal」という概念を H. Corbin が mundus imaginalis(le monde imaginal)なる造語をもって訳したのに倣って、analogia imaginalis とも呼びうる類比である。それは空間の観点から一挙に「存在の創造」を考えるのではなく、時間の観点から徐々に「イマージュの生成」を考える、超越を内在のうち含んだ想像即創造論である。

(2) 想像力を、カント的な感性と悟性との間にではなく、ベルクソン的な知性と直観との間に位置づける analogia imaginalis は、形而上学の新たな可能性を示唆する。伝統的な形而上学は、「多」のなかに「一」を確認し、差異性（現象）を同一性（原理）に還元する営為であったが、こうした同一性と差異性の二項対立の外に出て、同一性を差異性へと解体する形而上学克服の試みがデリダやドゥルーズによってなされてきた。しかるにベルクソンによるアナロジーの美学は、同一性へと帰還するのでも差異性へと転換するのでもなく、イマージュの流動における類似性から同一性および差異性へと上昇／下降しつつ類似性に戻るという形で、超越即内在を生きる生成論として、新しい形而上学の誕生を告げるものと見ることができる。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）


① 瀧一郎「ベルクソンによるプロティノスの受容」『新プラトン主義研究』査読有、第 13 巻、2014 年(印刷中).

② 瀧一郎「ベルクソン草稿研究−プロティノス講義および美学講義について」大阪教育大学 美術教育講座・芸術講座『美術科研究』査読無、第 30 巻、45-55 頁、2013 年.

③ Taki Ichiro, “Comparison and Type: Aesthetics of OTSUKA Kasuji” *Summit Forum: Western Aesthetics in View of the East*、査読無、2011、p.153.


〔学会発表〕（計 5 件）


① 瀧一郎「ベルクソンによるプロティノスの受容」新プラトン主義協会大会、2012 年 11 月 25 日、南山大学

② Taki Ichiro, “La citoyennete qui s’ouvre dans la philosophie de Bergson” ASPLF（フランス哲学連盟）大会、2012 年 8 月 20 日～26 日、ルーヴァンカトリック大学（ベルギー）

③ Taki Ichiro, “Works and Heroes: Analogy between art and morality in the philosophy of Bergson” IAPL（国際哲学文学連盟）大会、2012 年 5 月 28 日～6 月 3 日、タリン大学（エストニア）

④ 瀧一郎「比較と類型−大塚保治の美学」High-level Forum on Western Aesthetics in the Oriental Vision 招待講演)、2011 年 8 月 3 日、Veilisr Hotel, Hohhot（中国）

⑤ Taki Ichiro, “Aesthetics of Analogy: Bergson and Zhuangzi” IAPL（国際哲学文学連盟)、2011 年 5 月 24 日、National Cheng Kung University（台湾）


〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## ６．研究組織

(1)研究代表者
瀧一郎（大阪教育大学）
　研究者番号：80242072

(2)研究分担者
無

(3)連携研究者
無